Crone Wars；After

旭日提督

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

オーダー６６が発令され、ジェダイ騎士団は壊滅した。

銀河の頂点はシス卿の手に渡り、銀河系は暗黒に包まれた。

皇帝の圧政は日に日に苛烈さを増していき、民衆は自らの誤りに気付くものの、全てはもう遅すぎた。

しかし、彼等は、彼女達は諦めていなかった。

――――共和国アウター・リム第３艦隊

未知領域探索を任務としていたこの艦隊は、シスと分離主義者の関係を突き止めて、

”分離主義者”から共和国を奪還するべく活動を開始した。
彼等は、彼女達は――――未だに、クローン戦争の渦中にあった。

目次

prologue——開戦の号砲　1

prologue――開戦の号砲

無限に広がる大宇宙……
静寂に支配された漆黒の世界、創造と破壊に満ちた神秘の世界――
そんな世界を、あたかも我が物だと言わんばかりに悠々と進む、白亜の集団。

――銀河帝国が誇る恐怖の権化、スター・デストロイヤー

インペリアルⅠ級艦〈インペリアス〉を旗艦に、複数のインペリアルⅠ級、ヴェネター級スターデストロイヤー、アークワイテンズ級軽クルーザーから成る純白の楔型集団が向かう先は、水の惑星、カミーノ。
惑星全土を海と嵐に支配されたこの惑星では、卓越した生物工学技術を有する原住民族、カミーノアンが暮らしていた。
彼等は本来、銀河帝国の一員であった。
それどころか、銀河帝国の成立に多大な貢献をした功労者でもある。
帝国建国の為の重要なプロセス、オーダー６６。

それが成功したのは、他ならぬカミーノアンの協力があってこそだった。
しかし、当の彼等は、恐怖に駆られていた。
”オーダー66”なるプログラムの目的が、彼等が想像していたものとは全く違うものがだったからだ。
共和国のため、と思って、議長の名前を信頼して行った行為が、他ならぬ共和国の崩壊を導いてしまったからだ。

われわれの帝国は、市民により運営される。新しい憲法を持つ！政治家ではなく、法そのものにより治められる帝国だ！正しい社会を造り、守ることに献身する帝国だ！安全で、安定した社会を！この帝国は、一万年もつづくだろう！――――――
”皇帝”パルパティーンは、建国時にそう宣言した。
カミーノアンの元老院議員も、拍手喝采をもって”皇帝”を迎えた。
しかし、パルパティーンがその約束を守ることはなかった。
非人類種族の弾圧から始まる数々の恐怖政策を、数年もしないうちにこの皇帝は始めたのだ。
以来、温和な”議長”から一転して恐怖を撒き散らすように変わり果てた”皇帝”の影に怯えながら暮らしていたカミーノアンは、次第に自らに忠実な軍隊を求めるように

なっていく。

そうして造り出されたもう一つのクローン軍――アンチ・トルーパーによる反乱が始まったのが、つい数日前。この軍隊をもって、カミーノは独立を宣言した。

当然、帝国は――皇帝は怒りに震えた。

裏切り者を始末せよ。

――命令は、至極簡素だった。

皇帝の命を受けた帝国軍は直ちに作戦行動を開始、この反乱運動の鎮圧に乗り出す。

碌な艦隊も持たないカミーノの防衛線を易々突破した帝国軍艦隊は、惑星の軌道上に陣取って軌道爆撃と地上軍の展開を開始する。

そうして帝国軍が地上にだけ注意を向けていた時、突如として”白い霧”が出現した。

帝国軍艦隊の後方に現れたその霧からは、紅白に彩られた艦隊が続々とハイパースペースから飛び出してくる。

雲海を切り裂くかのように姿を現した紅白の楔型集団――――帝国に再編された消滅した筈の、共和国宇宙軍艦隊。

”亡霊”じみた、存在しない筈の艦隊。

彼女達は、それが当然だと言わんばかりに帝国軍艦隊へと突撃し――砲撃戦を開始した。

～戦艦〈インフィニティ〉～

【ＢＧＭ：ドヴォルザーク　交響曲第九番「新世界より」第四楽章】

「全艦、戦闘開始！分離主義者共を蹴散らせ、主砲発射（Feuer）!!」

「了解（Yes sir）!!」

銀河共和国残存勢力――リパブリック・レムナントの旗艦、改ベラトール級超弩級戦艦〈インフィニティ〉の艦上にて、艦隊指揮官にして残党軍（レムナント）を一纏めに掌握する総司令官、シャルロット・フォン・ブリュッヒャー上級大将は高らかに開戦の号令を宣言する。

レムナントのクローン・トルーパー達は彼女の命令を忠実に実行し、かつての兄弟達

に向けて青色のレーザーとミサイルの発射ボタンに手を掛けた。
「な、何事だ……ッ！」
「て――敵襲です！正体不明の敵が、わが艦隊に攻撃を加えています！」
「ええい……正体不明だと!?」
想像もしなかった方角からの奇襲により、帝国軍艦隊は大打撃を受けた。
満足にスターファイターを展開する暇もなく、スターデストロイヤーのシールドには次々と青色の稲妻が降り注ぐ。
「第１戦隊は本艦の両翼につけ！〈フォーミダブル〉と〈イラストリアス〉は展開して敵艦隊を包囲しろ！」
シャルロットの手足のように、レムナント艦隊は迅速に陣形を再編成する。
ハイパースペースから出たばかりの無秩序な隊形から、惑星を相手の背にしての包囲殲滅陣形へと。
第１戦隊を編成するレガシー級重巡洋艦〈リダウタブル〉〈リレントレス〉は〈インフィニティ〉の両舷に寄り添うように展開し、旗艦に向かうミサイルを撃墜し、砲撃をシールドで受け止める。
一方で、分艦隊旗艦の役割を与えられたヴェネターⅡ級戦闘空母〈フォーミダブル〉と〈イラストリアス〉に率いられた部隊は、艦を横隊に並べて封鎖線を築き、砲火を帝国艦

隊へと集中させる。
「艦載機隊、発進！」
「了解、ファイター隊発進します」
布陣を完了したレムナント艦隊は制圧戦に移行し、各艦からスターファイターが続々と射出される。
旗艦の〈インフィニティ〉は勿論のこと、空母としての能力が高いヴェネター級は、護衛艦のアークワイテンズ級と改ペルタ級フリゲートに囲まれた輪形陣の内側から、帝国から完全に制宙権を奪うべく数十機にも及ぶファイターを発進させる。
ＡＲＣ―１７０戦闘攻撃機から成るレムナントのスターファイター部隊は、敵のスターファイターの出撃が完了する前に護衛艦に殺到し、震盪ミサイルと爆弾の雨を降らせて敵の防空網を粉砕する。
そこにＢＴＬ―Ｂ艦上爆撃機が突入し、スターデストロイヤーの武装やセンサー類目掛けて大量の爆弾を投下、帝国軍の戦闘能力を奪っていった。
「護衛艦、また一隻撃沈されました！このままでは……」
「本艦にも被害が蓄積しています！艦橋部のシールド出力、６２％まで低下！」
帝国軍艦隊旗艦〈インペリアス〉の艦橋では、オペレーターの悲痛な報告が響く。
旧式で脆い護衛艦のアークワイテンズ級帝国軍軽クルーザーは、レムナントの苛烈な

ミサイル攻撃により全身穴だらけとなって宇宙を漂うデブリと化した。
「狼狽えるな！艦を反転させろ！主砲を敵艦隊に向けるんだ！」
艦長は冷静に、的確な指示を飛ばしていく。
次第に統制を取り戻した帝国軍も、レムナントに対抗すべく残ったスターファイターを全て発進させる。
帝国のヴェネター級スターデストロイヤーとクエーサー・ファイア級クルーザーキャリアーからはボールに板を付けたようなＨ字形の簡素な戦闘機――ＴＩＥ／ｌｎ制宙スターファイターが吐き出され、自分達のわが家とも言える母艦の頭上で暴れまわるＡＲＣ―１７０スターファイターとＢＴＬ―Ｂボマーに襲い掛かった。
帝国軍の爆撃機は惑星上に展開しているため、呼び戻すには時間がかかる。だが今の帝国軍は、戦闘機さえあれば良いのだ。艦隊を守るファイターさえあれば、忌々しいレムナントの爆撃機は引き揚げざるを得なくなる。なので帝国軍は敢えて爆撃機を呼び戻さず、艦載機を防空に専念させた。
レムナントと帝国軍艦載機は死のダンスを繰り広げ、ＡＲＣ―１７０とＴＩＥ／ｌｎ戦闘機は互いにレーザーの応酬に専念し、逃げ遅れたＢＴＬ―ＢはＴＩＥ／ｌｎに襲われてしめやかに爆破四散する。
「わが軍は、制宙権を取り戻しつつあります」

「ようし、その調子だ」
次第に立ち直り、本来の強さを発揮しつつある帝国軍に、士官達は満足する。
だがそこに、更なる凶報が舞い込んだ。
「な、て……敵艦隊の一部が突出、速い!!」
「ぬぅっ……突出した敵艦隊に集中砲火を加えろ!」
「やっていますが……敵が速すぎます!」
レムナントは次なる一手として、駆逐艦による宙雷突撃を敢行する。
後方に布陣するヴェネター級とペルタ級、そして新型重巡洋艦マハムント級に援護されたレムナント宙雷戦隊は、回避機動を取りながら敵空母を目指して吶喊する。
新型軽巡洋艦オーソンムント級1隻に率いられた改アークワイテンズ級駆逐艦2隻から成るユニットが2セット、それぞれ帝国軍艦隊に交錯するよう左右から猛烈な勢いで接近する。
付近を飛行するＴＩＥファイターを艦首で強引に押し潰しながら航行したレムナント宙雷戦隊は、射程距離まで近づくと一斉に量子魚雷を発射した。
中にはギリギリまで接近して魚雷を発射し、空母のヴェネター級を討ち取る戦果を挙げる艦もいる。
「……あの艦は?」

「はっ！――第１９２駆逐戦隊の〈ハードケース〉です！」
「ほう、中々に気概のある奴じゃないか。よぅし、我々も負けてられんな。ここで一気に畳み掛ける！ＶＬＳ解放、対艦巡航ミサイル、第二斉射！艦首マスドライバーキャノン、充填開始！」
宙雷戦隊の勇戦に触発されて、主力艦隊の攻撃もいっそう苛烈さを増していく。
先の突撃で駆逐艦２隻が大破、ないしは沈んだものの、レムナントの優勢は変わらない。
ここで一気に更なる攻勢に出て敵艦隊を叩くべきであると、シャルロットは判断した。
「敵旗艦から高エネルギー反応！」
「いかんッ、躱せ！」
「無理ですっ、間に合いませんッ!!」
「こうなったら……ハイパースペースに逃げ込め！行き先などどうてもいい！」
「しかし……それでは地上軍が…」
「そんなものに構ってられるか！やると言ったらやれ！」
「り、了解――！」
〈インペリアス〉を始めとする帝国軍艦隊は、包囲網を抜けるべく活動を開始する。

一度射出したファイターを大急ぎで回収しながら、〈インフィニティ〉の射線から抜けるべく、敢えて距離を縮める賭けに出る。

しかし、軍配はレムナントの側に上がった。

「マスドライバーキャノン……発射（Feuer）!」

〈インフィニティ〉の艦首から、猛烈な勢いで特大の砲弾が射出される。

雷光の矢と化したマスドライバーキャノンの砲弾は一瞬のうちに帝国軍艦隊に到着し、〈インペリアス〉の右隣を航行していたヴィクトリーI級スターデストロイヤーの艦首に着弾。同艦の艦尾付近で炸裂した。

艦首から艦尾まで貫かれたヴィクトリー級艦は内側から膨れ上がるようにして爆散し、その直後、残存帝国軍艦隊はハイパースペースへと逃げ帰るように突入した。

「……敵艦隊、反応全て消失しました」

「うむ。――初戦にしては、上出来だな」

潰走する敵艦隊を前に、シャルロットは満足気に笑みを溢す。

――さて、重要技術はこれで押さえたも同然だが、連中は果たしてどう出るものか……

艦隊だけでなく、軍そのものを率いる立場にあるシャルロットは、この後に起こるであろうカミーノアンとの交渉と、帝国の報復に対して頭を悩ませなければならなかっ

た。

――時に、ヤヴィンの戦いの９年前。

過去の戦争（Crone Wars）に囚われた共和国の残滓と、分離主義者と同じく暗黒卿が支配する銀河帝国。

両陣営の戦いは、ここに火蓋を切って落とされた。